

名大の時間

「私たちの歴史」を紡ぐために

か。社会福祉史論という講義を担当していることもあり、学生とよく話をする。すると「暗記すること」と答える学生が毎年何人かいる。確かに、受験のことを考えると「暗記すること」は重要なかもしれない。しかし、「歴史を学ぶこと」は単に暗記をすることなのだろうか。

近代以降、日本の社会福祉がどのよう

に形づくられてきたのか、これが講義でのテーマだ。社会福祉の教科書にはたくさん「偉人」がでてくる。社会福祉の黎明期において、先駆的な実践をしてきた人々で、社会福祉の礎を築いてきた人物といえる。

近代以降、日本の社会福祉がどのよう

の偉人が社会福祉の歴史を作ってきたかというところというわけではない。近代国家が作られていく過程で多くの民衆が、苦しみながらも、もがき、必死に生きてきた。

大正中期には、それまで行われてきた慈善事業から、組織的で科学的、そして社会的な社会事業が成立した。もちろんそこには多くの「偉

人」が関わってきたが、その根底には民衆のさまざまな生が存在していた。ある著名な社会福祉学者は社会福祉を「生きた人々と共に歩む」ものであると言った。民衆思想やその実態、苦悩などを知ろうとしなければ共に歩むことは出来ないだろう。歴史は民衆が意志を持って創ってきたものと言えるかもしれない。

教科書に載っていることが「歴史の全



代社会はこのように無数の「小さな歴史」の上で成り立っている。この「小さな歴史」の上で私たちは何をすべきなのか。「歴史を学

でも「歴史を学ぶ」とはできる。これは社会福祉に限った話ではない。近所の人・家族・そして自分自身にも歴史は存在するし、それは掛け替えのないものだ。現

ぶこと」は「暗記すること」ではなく、自身が生きる今と未来を考へることなのかもしれない。

社会福祉学講師

江連崇

「歴史を学ぶこと」は一体どういうこと